

REITファンドへの資金集中、上限近い?

投資信託業界2016年上期の動向と今後の見通し

ドイチュ・アセット・マネジメント 資産運用研究所 所長 藤原延介氏

投資信託業界では昨年まで続いた、現預金からアセットアロケーション型など資産運用の中核となる、いわゆる「コアファンド」へと資金を振り向ける動きが急減速している。ドイチュ・アセット・マネジメントの資産運用研究所はこのほど「2016年上期の投資信託業界動向」を資産運用研究会で発表。所長の藤原延介氏が業界の変化とその背景を解説している。

投信購入に「急ブレーキ」

16年上期、国内で販売されている追加型株式投信（除くETF＝上場投信）への資金流入額は1.9兆円だった。このままでいけば16年は、15年通年の流入額8.7兆円には遠く及ばず、4年ぶりに資金流入額が前年を下回ることになる。

ちなみに分配金支払額は毎月4000億～5000億円で推移しており、これを加味すると16年上期は実質的に資金流出になった可能性が高い。マイナス利金導入などで金融市場が混乱する中、個人になじみの深い預金や個人向け国債などがわずかながらもプラスの利回りを維持している状況では、リスクをとって資産運用を加速させようとの動きが強まるることは当面、期待しつづく。

「外国REIT」人気鮮明

投信業界が苦戦する中、人気を一身に集めているのが外国REIT（不動産投信）ファンドだ。16年上期の流入額は1.4兆円と、既に15年通年の1.6兆円に迫る水準に達している。

個別ファンドごとに資金流入額を見たランキングでも、外国REITファンドは1位から5位までを独占した。加えて7位と12位も抑えて、

トップ12位以内に7本がランクインしている。いずれも毎月分配型で、足元の分配金を基に計算した分配金利回りが20%台と高水準であることが特徴。投資家の分配金ニーズが依然として高いことが証明された格好だ。なお、外国REITファンドは多数あるが、ランキングに登場する上位7本に資金が集中するといった傾向も確認されている。

資産クラス別で、外国REITファンドに次いで資金を集めたのが国内株式ファンドの約6300億円で、3位にはアセットアロケーション型ファンド（約3300億円）、4位には国内REITファンド（約500億円）が入った。ちなみに国内REITファンドは日銀のマイナス利金導入とともに基準価額が急上昇して解約が目立った一方、為替取引を組み込んだファンドのシリーズが500億円ほど集めており、販売会社によって対応が分かれたようだ。

REIT人気はいつまで？

REIT人気はいつまで続くのか？ REITファンドはコア・サテライトでいえば、サテライトの商品であり、ニューマネーに向かっているというよりは、別のサテライト運用の商品

から資金が向かっているという印象だ。国内で設定されたREITファンドの残高は既に12兆円程度に達しており、高水準の分配金を払い出していることを考えると、預金などからのニューマネーがなければ、ここからさらに残高が大きく伸びるとは考えていない。

REIT市場の時価総額はグローバルで130兆円ほどあり、このうち、日本で人気の高い米国REITは70兆～80兆円ほどとなっている。個別ファンドで見ると1兆円を超えるファンドも増え、運用上限に近づいているファンドもあることから、REITの次を考える投資家や販売会社も増えてくるものと予想される。そもそも一つの資産クラスだけを積極的に保有することは好ましい運用とは言えず、業界全体で資産を分散する動きを推進していく必要があるだろう。

ならば、外国REITの次に注目されるものは何か？ 利回りを意識した投資資金であるということを勘案すると、米ドルの次としては豪ドル関連の商品や、REITだけでなく高配当などを組み合わせたタイプなどが受け入れられやすいかもしれない。14年あたりをピークに資金流出が続くハイイールド債券ファンドについても、米国ハイイールド債券を対象とする商品は4～6月に資金流入に転じており、投資適格債券の利回りがさらに低下するようだと、再びハイイールド債券ファンドが見直されることも予想される。